

二号車は一旦止まったが、すぐに発車、なぜ救助しないのかと思つたがそのままスピードを上げ承徳に着いた。一号車に乗っていた……と思うとゾーとした。

落ちた車を助けもせず軍隊は薄情なものだなあと思つた。後で聞いたが、あの峠は満軍の警戒駐屯地域なので満軍が直ちに救助に出動、死者二十人、負傷十人だつた由。二号車は敵襲と判断脱出したとのこと、敵襲だったのか単なるパンクだったのか新兵には知る由もない。いづれにしても自分の運の強さに感謝した。

その後いろいろあつた。南方転属を中隊長に願ひ出たが諭されて断念。終戦後アマーバ赤痢にかかり高熱で意識不明になつたが木炭の粉で九死に一生を得て治り、シベリヤに強制抑留され、炭坑作業の強制労働と飢餓で倒れる寸前、ダモイ列車に乗れたことなどを想ひ合わせると、私は強運の星の下に生きて来たと思う。

暗号教育の成績が良かったのか、そのまま司令部勤務となり、やがて二年兵の上等兵となり暗号教育の助手となつたが、初年兵を撲る気にはなれなかつた。やがて関東軍司令官命令で私的制裁禁止となり、我々は

撲られつ放しになつた。

ノモンハンからの手紙

静岡県 小山 芳江

私の夫、小山増治は、大正五年一月二十九日生まれで、支那事変の勃発するすこし前の昭和十二年三月に入営し、主に満州に勤務しました。

昭和十四年五月十二日にハルハ河で小部隊の衝突から、日ソ両軍の本格的戦闘に発展したあの「ノモンハン事件」には、重機関銃手として出動していました。関東軍一万五千は七月一日より反撃、緒戦では、戦車百両を擱座、炎上させるなど戦果を上げたようです。

八月二十日からソ連軍は四、五倍の兵力で攻勢に移り、次々と日本軍の陣地を奪取していったのですから、夫が兄小山正雄の所へ手紙を書いたのは七月三十日です。で戦闘のほんの少しの暇を見て書いたようです。

では全文を次に紹介します。

七月三十日八時一〇分、ホロンバイル草原

満州国海拉爾山県「武」部隊村田隊

小山 正雄 殿

小山 増 治

真夏の太陽がさんさんと降り注ぐホロンバイルの砂地の穴の中で砲声に起こされ、爆音の子守歌を聞き乍ら一時のまどろみ、今までのラップが砲声に変わりました。

去る十五日、二年有五ヵ月、天晴れ帝国の軍人として育てて呉れた中隊を離れ、一躍戦乱の巷このホロンバイルに足を踏み入れてより既に十日、元氣旺盛御奉公致しております。

こうしている間も奴等の盛んな砲撃がしております。ヴァーンヴァーンと前に後に右に左にちゃんちゃん落ちてきます。昨日は久方振りに襦袢の洗濯を致しました。ソ連軍の捨てて行った鉄帽に黄色い泥水を汲み取って、やはりソ連軍の石鹼で洗濯、よく落ちました。この頃では髭も相当伸びて来ましたが、何んせ余

り濃くはないひげ、ま、よ伸びるだけ伸びる。

何しても一番不自由を感じるのには煙草ですね、三日から四日に二十本位、それでは到底足りんです。今まで兵舎にいる時は一日に二十本以上吸いましたから、今になって困らせようなんて皮肉なものです。この前、中隊を出る時送りました小包、今ごろは着きおることでしょう。

ソ連軍の機銃弾の中、頭の上の澄み切った青空に日の丸も鮮やかな友軍機が、朝日にさらさらさせ乍らゆうゆう飛びおります。それではあと先き止めなき事のみですが失礼いたします。

—ホロンバイルにて第二信—

あれより数回の激戦にも微傷だに受けずに元氣におります御安心下さい。中に紙が見付からず、ようやくソ連軍の捨てて行った戦車の中より奴等の雑記帳を探し出して来ましたから。早速三日ばかり前に奴等の総攻撃だろうと思ふ戦闘にぶつかりました。その時の日記を拾いましょう。

八月七日晴、夕食時奴等出撃して、猛烈に第一線陣

地をありとあらゆる砲を持ち出して、丁度自分の立哨中、来るか戦車と待ちおれどとうとう来なかつた。しかし、これからどうなることやら、飛行機か戦車何れかが来ることだろう。かすかに飛行機の音がし始めた。来るか対地射撃か、あるいは空爆か。もうもうと立ちこめる砂煙に視界がきかない。

現在十九時、やはり来た来た、蜘蛛の子を散らしたように五、六十余機。(対地外区に) 頭上よりパンパン機銃、夕日にその撃ちだす弾が白く糸を引くのがよく見える。しかしまたたくまに友軍機が一機また一機落ちる。一体何機落ちたろう。

射撃が少なくなつて来た。しかし、一秒間に四発位は落ちる。だから猛撃の際は何発位落ちたろう。奴等は地上部隊まで、対空射撃を始めた。物凄い難事だ。こんどは戦車を待ちおる。最後の一本残つた煙草に火を付け吸う。戦死でもして好きな煙草を残したのでは心残りだから。

頭上をパンパンビューンビューンブルンブルン、弾がひっきりなしに飛ぶ。蚊の大軍が押し寄せたように

高射砲の破片が落下してくる。奴等は砲で頭を押さえて置いて、戦車か飛行機で第一線を撃破しようとしてくるが、中々向こうの思うようには行かぬ。精神が遠うから奴等の前、この位の砲撃でじゃんじゃん逃げたのでは。俺たちもその積りでいるのだからちよつと違いますからね。後略

打ち寄せる 大波小波突き破り

しのつく雨も 何のその

一人進むぞ 日の御旗

ではまた書きましょう。本家の方へもこれを見せて下さい。紙がもう有りませんから。

夫は、ノモンハンの戦鬪で全身に数個所敵弾を受け、右眼鏡も打ちぬかれましたが、目は眼鏡をかけていたため失明せずにすみました。この時の模様について日記に記してありますので紹介します。

― 記念の眼鏡の由来 ―

昭和十四年七月二十四日、ノモンハン七三高地において、昨夜来の我が猛攻により敵はようやく夜明け前同地を捨てて後に退くも、敵砲弾は間断なく身邊に落

下する。

しかし一度踏み込みたるこの地より一步も退らず。日の出ごろ敵もようやく断念したか砲声静まる。しかし、一寸頭を出せば敵狙撃兵が待つてましたと狙い撃つ。恐らく蠅がうるさくて仕方がない。

我が重機関銃陣地構築に支障を来たせり。故に彼の狙撃兵なきものにと小銃を取りて狙う。「必中あれ」と右食指一本に全精神を込めて引き金を引く。一瞬変な反動を感じ付近より「命中」の声を聞くと同時に、左頬に生温かき感じありたるに、右手を以て見るに尊き血。

さては「やられた」と思うも、意識明らかなり。落着きて見れば、小銃の命、照星頂がもぎ取られ、また我、右眼鏡小豆大の穴有り。考えるに撃発と同時に、敵の弾、飛び来り照星頂に命中し、照星頂左頬に弾は右眼鏡に来るものなり。眼鏡なくば無論右眼失明せるものなり。

この後、夫は後方に向かつて歩き出しましたが重い物は次々と捨てて味方の陣地にたどり着いたそうで

す。

野戦病院で手当を受けて東京に帰され、病院で破片を取りましたが、胸の骨に刺さったのは害が無いからと死ぬまでそのままでした。

尊い命が愛国の精神に燃えた若者達が、ソ連の新兵器の前にバタバタと死んで行く。今さらながら悲しく胸のつまる思いでした。世界が平和になる日の一日も早く来ますようにお祈り致します。

軍隊生活七年の青春

滋賀県 西村 安一

私は、二十歳で徴兵検査により、甲種合格となり、留守をしてくれる伯父と妹を残して、昭和十四年一月十日、敦賀歩兵第十九連隊第一中隊に入営しました。初年兵の生活、起床ラッパで起き、点呼、食事準備及び片付、演習訓練、内務班教育、兵器・被服の手入れ、検査を受け、点呼、消燈ラッパやつと一日が終り眠り